

実習施設と教育施設との連携に向けての具体的方策 —看護学部開設3年目に導入した看護学実習連携会議の効果—

古 都 昌 子¹⁾ 小 村 三 千 代²⁾ 岩 本 郁 子²⁾ 加 藤 章 子²⁾
岡 本 眞 喜 子³⁾ 七 田 み ど り³⁾ 杉 崎 け い 子³⁾

¹⁾札幌市立大学看護学部, ²⁾東京医療保健大学東が丘・立川看護学部, ³⁾国立病院機構東京医療センター看護部

抄録：本研究は、看護学部と実習施設において、臨地実習指導の充実に向けて導入した「看護学実習連携会議」の効果と課題を明らかにし、今後の実習施設と教育施設の連携における具体的方策への示唆を得ることを目的とした。「看護学実習連携会議」とは、初めて看護学部学生の臨地実習を受け入れる実習施設の実習指導者と大学教員が共同で企画・運営を行い、実習指導者と大学教員を混合してグループを編成し、事例検討を中心に運営した。1年間の会議終了後、参加した実習指導者と大学教員へ質問紙調査を行った。その結果、「看護学実習連携会議」を導入した効果として、実習指導者と大学教員とのコミュニケーションに関連した【連携】や《相談》の平均値が高かった。【連携】および【学生把握と実習指導方法への活用】の平均値は何れも3.00以上であり、開催回を追うごとに満足度はほぼ上昇していった。話し合う場を意図的に設けたことで、実習指導者と大学教員とのコミュニケーションが進めやすくなり、事例検討をつうじて学生の可能性を肯定的にとらえる効果が得られた。今後も実習指導者のニーズを具体的に把握し、「看護学実習連携会議」の企画・運営に反映させることが必要である。

キーワード：看護基礎教育, 臨地実習, 看護学実習連携会議

Clinical-Academic Collaboration Meetings for Nursing Clinicals

Masako Furuichi¹⁾, Michiyo Komura²⁾, Ikuko Iwamoto²⁾, Akiko Katoh²⁾
Makiko Okamoto³⁾, Midori Sichida³⁾, Keiko Sugizaki³⁾

¹⁾School of Nursing, Sapporo City University

²⁾School of Nursing at Higashigaoka and Tachikawa, Tokyo Health Care University

³⁾National Hospital Organization Tokyo Medical Center

Abstract: This research examined the Clinical-Academic Collaboration Meetings for Nursing Clinicals, which were introduced for improving clinical practice instruction in a nursing faculty and hospitals as well as for discovering measures for collaboration between educational institutions and hospitals in the future. The collaboration meeting was planned and run by university teachers and practice instructors at the hospitals that accept students from the nursing faculty for their initial clinical practices, primarily by case examination in groups composed of both teachers and instructors. After ending the meetings that lasted for a year, a questionnaire survey was administered to the meeting participants. Collaboration was one of the conceptual frameworks related to communication between university teachers and practice instructors in the questionnaire survey. It showed a high mean value; so did one of the factors in the framework: consultation. The mean values of collaboration and another conceptual framework, which is understanding the students and applying that understanding to clinical instruction, were both found to be over 3.00 due to the meetings. The satisfaction

rate increased session after session during the meetings. Providing opportunities for discussion facilitated teachers and instructors communicating with each other, enabling them to see student strengths during case examinations. Capturing specific needs of instructors and reflecting them in the planning and operation of Clinical-Academic Collaboration Meetings for Nursing Clinicals is important to better educate students.

Keywords: Basic nursing education, Nursing clinical, Clinical-academic collaboration meetings for nursing clinicals

1. 緒言

看護基礎教育において臨地実習は、既習の知識・技術・態度を統合して看護を実践していくプロセスを学ぶ重要な科目であり、看護実践能力を臨床で培い、実践としての看護学を学ぶとともに専門職業人としての資質を育成する場となる。杉森・舟島は、看護基礎教育課程における臨地実習について、「学生が既習の知識・技術を基にクライアントと相互関係を展開し、看護目標達成に向かいつつ、そこに生じた現象を教材として、看護実践能力を習得するという学習目標達成を目指す授業である¹⁾」と定義している。臨地実習は、瞬時に現象が変化している臨床というフィールドを用いて、現実の患者との出会い、そこにおける患者とのかかわりから学ぶダイナミックな固有のプロセスを有している。

看護基礎教育において、臨地実習指導の果たす役割は大きく、重要な授業科目のひとつであることはいままでもない。実習目標の達成に向けては、実習指導者と教員の協働が不可欠である。しかし、看護基礎教育の現状として、実習助手をはじめ教員が専任でかかわる実習指導体制(以下、体制)や専任実習指導者が配置された病棟で実習する体制、実習病院の実習指導者が業務し、兼任で指導する体制など、実習施設、教育施設のそれぞれの状況や指導体制の考え方により、様々な体制がある。

看護学実習指導における実習施設と教育施設の連携に関する先行研究としては、実習指導者と教員との役割における連携²⁾³⁾など、多数取り組まれてきた。原田は、「臨床と教育の連携は、実習指導者と教員の個人的なコミュニケーションと会議などを中心とした組織的なコミュニケーションによって協働的に発達する⁴⁾」としているが、具体的な方法については課題となっている。また、椎葉は、実習指導者と教員の協働について調査し、「その特性として実習の問題事項に関する協働はでき

ているが、実習指導の充実に関する連携は十分でない⁵⁾」ことを明らかにしている。

本研究では、実習施設が、初めて看護学部の大学生の臨地実習を受け入れるにあたり、臨床側と教育側の連携基盤を築き、臨地実習指導の充実に向けて看護学実習連携会議(以下、連携会議とする)を導入することとした。そこで、実習指導者と大学教員の連携による臨地実習指導の充実に向けて、連携会議の効果と課題について明らかにし、今後の連携のあり方を検討するための基礎資料とすることを目的とした。

なお、本研究における看護学実習連携会議とは「初めて看護学部学生の臨地実習を受け入れる実習施設の実習指導者と大学教員の連携基盤を築くことを目的として開催された会議」である。

企画・運営は実習施設と大学が共同で行い、実習指導者と大学教員を混合で編成したグループによる事例検討を中心に運営し、「指導を語る会」として運営した。2012年度は2012年4月、7月、11月、2013年3月に4回開催した。企画の概要および内容は、表1、表2に示すとおりである。

2. 研究方法

1) 研究対象

看護学部の臨地実習を受け入れているA病院の実習指導者62名および臨地実習指導に関与しているB看護学部教員34名の合計96名。

2) データ収集期間

2013年3月28日から4月5日

3) データ収集方法

留め置き法による質問紙調査を実施した。質問紙は、先行研究および実習施設で用いられていた「実習指導者専任化体制の構築に向けた教育と施設の連携」のガイドライン(施設基準)を参考に独自に作成した。

表1 看護学実習連携会義企画の概要

1. 目的	看護学実習において学生が効果的に学びを深め、看護の実践能力が身につくことをねらいとする。
2. 目標	1)実習の年間計画を理解し、運営する。 2)実習における学生の学びおよび課題を共有する。 3)実習指導に関して、実習指導者と全教員が語り合える。
3. 方法	・会議の年間計画は下記のように運営する(表1)
4. その他	1)会議は年4回開催する。 2)企画委員は、大学と臨床から各2名を選出する。 3)企画委員は、年間計画・運営・評価をする。 4)会議には、議事録を作成する。 5)各看護学実習の具体的な打ち合わせは、各領域が企画・実施する。

その際に指導者間のつながりと教育への活用の2方向からとらえ、【連携】および【学生把握と実習指導方法への活用】の2つの枠組みとした。さらに連携には《相談》《情報共有》《連絡調整》の3つの内容を含んだ。

質問紙は、4回目の連携会議の終了時に参加者に配布し、留め置きにて部署内の、専用ボックスにて回収した。調査の枠組みは、【連携】と【学生把握と実習指導方法への活用】に設定し、【連携】は《相談》《情報共有》《連絡・調整》で構成した。質問項目は全28項目からなり、基本属性4項目、連携会議全般に関する事項5項目(出席回数、満足感)、【連携】14項目、【学生把握と実習指導方法への活用】5項目を内容とした。また、質問紙の回答は「5:とても良かった」から「1:全く良くなかった」の5段階で求め点数化した。質問紙の内容は表3に示すとおりである。

4)データ分析方法

単純集計および記述統計値を算出し、傾向を検討した。

5)倫理的配慮

(1) 連携会議終了後、出席者に研究の趣旨について文書および口頭にて説明し、研究協力の依頼をした。その際、質問紙に記載された内容は研究以外に用いることがないことや、研究協力をしなくても業務上の評価などには一切影響せ

表2 看護学実習連携会議の回ごとの内容

回	月	テーマ
第1回	4	1. 教育理念および実習の概要 2. 指導を語る会：看護学生へのかかわり方
第2回	7	指導を語る会：事例検討 学生がより良い方向へ変化した事例から考える①
第3回	11	指導を語る会：事例検討 学生がより良い方向へ変化した事例から考える② —実習指導者と教員の連携に視点を置いて—
第4回	3	指導を語る会：事例検討 1年間の実習指導を振り返り、学生の現状を共有しよう！—学生を今一度とらえて、指導方法を話し合おう—

ず、不利益は被らないことを伝えた。

(2) 研究対象者には、研究協力は自由意志であり、拒否できることを説明し、質問紙の提出をもって同意が得られたとすることを伝えた。

(3) 研究データはパスワード付きの専用パソコンで管理し、鍵付きの収納庫に保管するとともに、個人が特定されることがないように匿名性の遵守には十分に配慮することを説明した。

(4) 研究データはコード化して処理することで、得られたデータから個人が特定されないよう、匿名性の遵守には十分に配慮した。また、研究終了後は速やかに質問紙をシュレッダーにかけ、パソコン上のデータは消去することを約束した。

なお、本研究は、B看護学部研究倫理安全委員会において承認(番号12-1-027)を得ている。

3. 結果

1)回収率

回答数は、実習指導者52名(回収率83.9%)、大学教員11名(回収率32.6%)、有効回答数は、実習指導者49名(有効回答率94.2%)、大学教員10名(有効回答率90.9%)であった。大学教員は、連携会議での関心の高さは伺っていたが、4回の会議終了後が年度末の異動時期などに相当したこともあり、回収率は低率にとどまった。

2)調査対象者の属性(表4)

臨床看護年数の平均値が実習指導者13.76年

表3 看護学実習連携会議アンケート用紙

<p>皆様のご理解とご協力のもと、今年度の看護学実習連携会議を4回開催することができました。連携会議へのご出席ありがとうございます。つきましては、連携会議に関しまして、皆様のお考えを伺いたいと思います。以下の文章をお読みになり、該当する番号に○を、()内はご記載下さい。</p>
<p>問1. あなたの所属について教えてください。 1)臨床 2)大学</p>
<p>問2. あなたの臨床での看護経験を教えてください。 ()年</p>
<p>問3. あなたの実習指導年数を教えてください。 ()年</p>
<p>問4. あなたの実習指導者講習会の受講歴について教えてください。 1)ある 2)ない</p>
<p>問5. 看護学実習連携会議への出席回数を教えてください。</p>
<p>問6. 以下のすべての設問に対して、該当する番号を1つ選んで○をつけてください。 5. とても良かった 4. やや良かった 3. どちらでもない 2. あまり良くなかった 1. 全く良くなかった</p>
<p>1)出席した看護学実習連携会議に満足している(出席した会議についてお答えください)。 (1)1回目(4月開催:年間計画と情報共有) (2)2回目(7月開催:学生がより良い方向へ変化した事例から考える) (3)3回目(11月開催:学生がより良い方向へ変化した事例から考える) (4)4回目(3月開催:年間振り返り)</p>
<p>2)実習指導において、声がかげやすくなった。 3)実習指導について、話がしやすくなった。 4)実習指導について、打ち合わせ(企画・運営)がしやすくなった。 5)実習指導について、相談がしやすくなった。 6)実習中の学生の行動調整において、依頼しやすくなった。 7)実習中のカンファレンスにおいて、日程調整がしやすくなった。 8)実習中の指導者、教員不在の際、対応がしやすくなった。 9)受け持ち患者について、調整(設定、変更)がしやすくなった。 10)実習中、指導上の調整が必要な場面で、連絡が取りやすくなった。 11)学生のレディネスが共有できた。 12)学生の目標達成状況が共有できた。 13)学生の実習評価が共有できた。 14)11)~13)について意見交換ができた。 15)患者の状況あるいは変化を共有できた。 16)学生を肯定的にとらえることができるようになった。 17)学生へのかかわりにおいて、困っていたことが明確になった。 18)指導場面において、学生にかかわる方向性がわかった。 19)指導場面において、具体的な指導方法が見いだせた。 20)指導場面において、学生へのかかわりに活かすことができた。 21)理想とする指導者像を描くことができた。 * 21)は分析には除外した</p>

表4 調査対象者の属性

対象 年数	実習指導者 n=49 平均値(SD)	大学教員 n=10 平均値(SD)
臨床看護 年数	13.76(7.35)	8.40(5.60)
実習指導 年数	7.92(4.27)	3.50(2.76)

(SD 7.35), 大学教員 8.40 年(SD 5.60), 実習指導年数の平均値が実習指導者 7.92 年(SD 4.27), 大学教員 3.50 年(SD 2.76), 実習指導者講習会受講済の者が実習指導者 40 名(81.6%), 大学教員 3 名(30%)であった。

3) 看護学実習連携会議の効果(表5)

- (1)設問 【連携】 および 【学生把握と実習指導方法への活用】 の14項目において、全項目について両者とも3.00以上であり、大学教員の方が実習指導者よりすべての項目において平均値が高かった。
- (2)【連携】 の3つの構成要素の《相談》《情報共有》《連絡・調整》の中で平均値が最も高かったのは、両者とも《相談》であり、実習指導者3.39, 大学教員3.70であった。
- (3)【連携】 14項目で最も平均値が高かったのは、実習指導者が「実習指導において、声がかげやすくなった」3.41であり、大学教員が「実習指導において、話がしやすくなった」3.80であった。
- (4)【学生把握と実習指導方法への活用】の平均値は、実習指導者3.42, 大学教員3.82であった。項目別の平均値で最も高かった項目は、両者とも「学生を肯定的にとらえることができるようになった」であり、実習指導者3.49, 大学教員4.00であった。

4) 看護学実習連携会議に対する満足度

1回目は実習指導者3.32, 大学教員は3.60, 2回目は実習指導者3.24, 大学教員4.11, 3回目は実習指導者3.44, 大学教員4.30, 4回目は実習指導者3.85, 大学教員4.33であった。平均値が最も高かったのは、実習指導者, 大学教員とも4回目であった。実習指導者は2回目にわずかな低下がみられ、その後、上昇傾向を示した。大学教員は、連携会議の回数を重ねるほど平均値が上昇していた(図1)。

表5 看護学実習連携会議の効果

質問項目	質問内容	臨床 (n=49)	大学 (n=10)	
		実習指導者	大学教員	
連携	相談	実習指導において、声がかげやすくなった	3.41	3.70
		実習指導について、話がしやすくなった	3.37	3.80
		実習指導について、打ち合わせ（企画・運営）がしやすくなった	3.33	3.60
		実習指導について、相談がしやすくなった	3.47	3.70
	情報共有	学生のレディネスが共有できた	3.29	3.70
		学生の目標達成状況が共有できた	3.18	3.70
		学生の実習評価が共有できた	3.10	3.40
		目標達成や実習評価の意見交換ができた	3.35	3.70
		患者の状況あるいは変化を共有できた	3.02	3.90
	連絡・調整	実習中の学生の行動調整において、依頼しやすくなった	3.33	3.50
		実習中のカンファレンスにおいて、日程調整がしやすくなった	3.16	3.30
		実習中の指導者、教員不在の際、対応がしやすくなった	3.06	3.40
		受け持ち患者について、調整（設定、変更）がしやすくなった	3.08	3.40
		実習中、指導上の調整が必要な場面で、連絡が取りやすくなった	3.31	3.44
学生把握と実習指導方法への活用	学生を肯定的にとらえることができるようになった	3.49	4.00	
	学生へのかかわりにおいて、困っていたことが明確になった	3.41	3.80	
	指導場において、学生にかかわる方向性がわかった	3.45	3.70	
	指導場において、具体的な指導方法が見いだせた	3.39	3.80	
	指導場において、学生へのかかわりに活かすことができた	3.39	3.80	

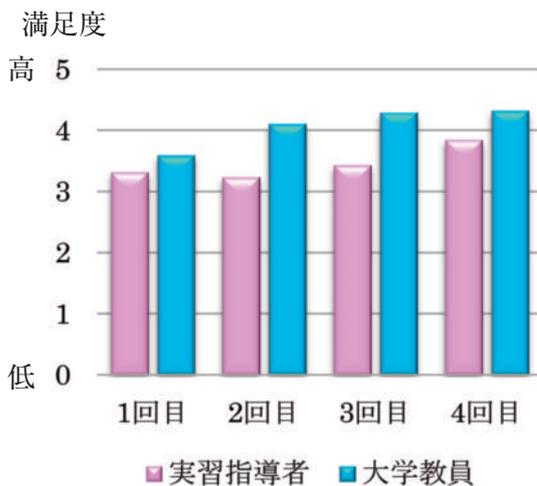


図1 看護学実習連携会議の満足度

において、顔の見える場、話し合う場を意図的に設けたことで、コミュニケーションが進めやすくなった効果と考える。泊らが実習について教員と指導に関わる看護師全員と話し合う機会を設ける必要がある⁶⁾と確認したように看護学実習の指導効果を高めるには、実習指導者と教員の円滑なコミュニケーションが重要である。まず、知り合うことから始まり、相互理解へ向けて担当者すべての顔の見える関係性を築いていく必要がある。また、今回、大学教員が実習指導者よりすべての項目について平均値が高かったのは、大学教員は各看護学実習の展開を前に連携会議の場を活用しようとする意識が高く、連携会議の効果を実感した結果と考える。

4. 考察

看護学実習連携会議を導入した効果と課題について以下の3点において述べる。

1) 看護学連携会議における顔の見える関係性の効果

はじめて看護学部の実習を受け入れる施設において、大学教員との関係性の構築に向けて工夫が必要である。「声がかげやすくなった」や「話がしやすくなった」などの指導者と教員のコミュニケーションに関連した【連携】《相談》の平均値が高かった。日常のインフォーマルなコミュニケーションの積み重ねが重要であることは言うまでもないが、全員参加を原則とした連携会議という場

2) 実習指導について具体的に検討する効果

連携会議の効果として、【連携】および【学生把握と実習指導方法への活用】の平均値は何れも3.00以上であり、開催回を追うごとに全体傾向としてわずかではあるが、満足度は上昇しており、回を重ねる毎に連携会議の目的は達成されていったと言える。その要因は、2回目以降、具体的な学生の状況を示した事例を検討する機会を通じて、実習指導者と大学教員の相互理解が深まり、実習指導の現場に反映された結果と考える。また、【学生把握と実習指導方法への活用】における《学生を肯定的にとらえることができるようになった》は実習指導者3.49、教員4.0ととも

かった。これは、オリジナルの事例について、学生が分かるプロセスをたどった成功事例や、教育的支援により、わかる→できる→わかるをたどった経過の分析により、学生の可能性を肯定的にとらえる共有ができた効果と言える。仙田が、学生を受け入れ模索する教員として今まで見なかった学生を見た教員の認知の変容について述べている⁷⁾ように新たな学生を発見したり、その変化を共有する機会が重要であると言える。

3) 今後の課題

平成 23 年にまとめられた看護基礎教育の方法と内容に関する検討会報告書においても「臨地実習の学習効果を高めるためには、教員と実習指導者の合同会議を開催するなど、両者が学生の学習状況等について情報共有等を行うことが必要である⁸⁾」とされており、今回の結果からも有効な情報共有の方法として連携会議を推進する必要性が確認できた。

今後の課題としては、連携会議に関して実習指導者の満足度が大学教員と比べて低かったことから、実習指導者のニーズを具体的に把握し、企画・運営にタイムリーに反映させる必要がある。実習指導者と大学教員の協働への影響が最も大きい要因は、会議参加や会議開催間隔であると言われている⁵⁾。従って、大学では、実習指導者と大学教員が相互理解を深めるために、まず、連携会議を立ち上げ、1回1回の会議の意味や内容を明確にして参加を促すことが、実習施設と大学の連携を形成・強化していくうえで重要である。

また、実習指導者と教員の連携を強化するには、連携会議での意見交換を契機として日常のコミュニケーションを活発に進めることが、望ましい指導体制の構築において意義深い。開学後の連携を目指したこの試みは、実習施設と教育施設の連携における示唆につながると言える。

5. 結論

- 1) 看護学実習連携会議を導入した効果として「声がかげやすくなった」や「話がしやすくなった」などの指導者と教員のコミュニケーションに関連した【連携】《相談》の平均値が高かった。
- 2) 【連携】および【学生把握と実習指導方法への活用】の平均値は何れも 3.00 以上であり、開催回を追うごとに満足度は上昇傾向にあり、回を重ねる毎に連携会議の目的は達成されていた。
- 3) 今後、実習指導者のニーズを具体的に把握し、連携会議の企画・運営にタイムリーに反映させる必要がある。

文献

- 1) 杉森みどり, 舟島なをみ: 看護教育学第 4 版. 医学書院, 東京, pp. 252, 2006.
- 2) 中西睦子: 病院実習指導者と教師の基本的役割 臨床教育論第 1 版. ゆみる出版, 東京, pp. 259-301, 1983.
- 3) 小澤桂子: 臨床実習指導体験から思うこと. Quality Nursing 4 : 29-33, 1998.
- 4) 原田広枝: 臨地実習における「看護学校と実践の場」の連携に関する研究— コミュニケーションと対等性の検討—. 教育経営学研究紀要 6 : 39-46, 2003
- 5) 椎葉三千代, 齋藤ひさ子, 福澤雪子: 看護学実習における実習指導者と教員の協働に影響する要因. 産業医科大学雑誌 32(2) : 161-176, 2010
- 6) 泊祐子, 栗田孝子, 田中克子: 臨地実習指導者の指導経験による指導のとらえ方の変化と必要な支援の検討. 岐阜県立看護大学紀要 10(2) : 51-57, 2010.
- 7) 仙田志津代: 看護教員の看護学生への認知の変容過程—臨地実習における看護教員と看護学生とのかわりをおして—. 医療保健学研究 1 巻 : 103-116, 2010.
- 8) 厚生労働省医政局: 看護基礎教育の内容と方法に関する検討会報告書, 2011.